

[成果情報]山梨県内におけるモモ枯死障害の現地発生実態

[要約]モモ若木(6年生まで)の枯死発生ほ場では、枯死障害樹全てで胴枯病が発症している。また、厳冬期前の剪定、強い剪定、および枝の基部を残す‘切り残し’剪定が行われており、枯死障害の発生を助長していると示唆される。

[担当]山梨県果樹試験場・栽培部・落葉果樹栽培科・池田博彦

[分類]技術・普及

[背景・ねらい]

春以降にモモ若木(6年生まで)が枯死または衰弱する枯死障害については、H16成果情報で冬季の強剪定が発生を助長することを報告したが、終息に至っていない。そこで、近年の発生実態を調査し、発生原因を究明する。

[成果の内容・特徴]

1. 発生状況についてアンケート調査を行ったところ、年による増減はあるが、枯死障害は毎年一定数の発生が見られる(表1)。
2. 2016～2018年の3か年に、延べ33か所の枯死発生ほ場を調査した結果、枯死または衰弱した樹の全てで胴枯病が確認され(図1)、障害発生への関与が示唆される。地上部や根域の状況から、枯死障害と判断されるほ場は22か所で、その他は土壤病害などによる枯死である(表2)。
3. 枯死障害と判断されたほ場のうち、95%は厳冬期前に剪定が行われている(データ省略)。さらに、80%の樹で強い剪定が行われており(図3)、94%の樹で枝の基部を残して切る‘切り残し’剪定が行われている(図2, 4)。また、苗木時における台木部分の切り残しからも枯れ込みが発生している(データ省略)。これらの管理が枯死障害の発生を助長していると示唆される。
4. 枯死障害発生ほ場の地表面管理や施肥管理、栽培品種、土壤pHと障害発生には一定の傾向は見られない(データ省略)。

[成果の活用上の留意点]

1. 芽かきや摘心、捻枝などの新梢管理や、秋季剪定を徹底し、冬季に強剪定を行わないようにする。
2. 厳冬期前に剪定が多く行われているので、若木の剪定は厳冬期を過ぎた3月を目安に行う。また、切り口の癒合促進のため、枝の基部まできれいに剪除し、切断面には十分量のトップジンMペースト等の癒合剤を塗布する。
3. 剪定作業については、H28、29年に情報提供した「モモ枯死症の発生抑制に向けて(第1報、第3報)」を、土壤病害の判定については「(第2報)若木の枯死症と土壤病害の見分けかた」を参考にする。
4. モモの枯死障害対策については、引き続き新規課題のなかで、胴枯病対策を中心に検討を行う。

[期待される効果]

1. 枯死障害の栽培技術面での対策を実施することにより、発生の軽減が期待できる。

[具体的データ]

表1 モモ枯死障害の年次別発生本数

調査対象JA(モモ栽培面積)	2016年	2017年	2018年
フルーツ山梨、ふえふき、南アルプス市 (3359ha)	1720本	260本	400本

※発生本数は、各JAへのアンケート調査の回答を集計し、概算で示した
モモ栽培面積は、平成24年産果樹市町村別統計(関東農政局甲府地域センター)による

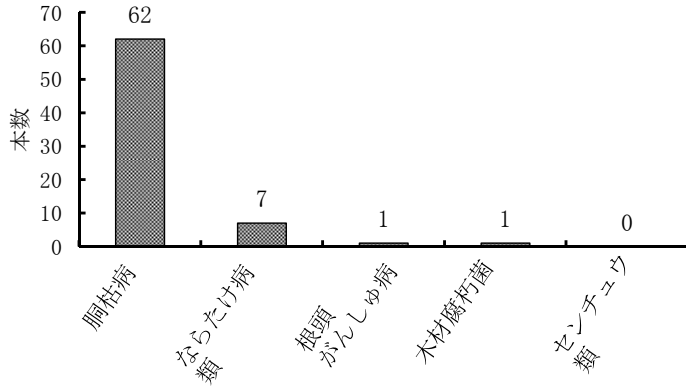


図1 現地調査ほ場(33か所)の枯死・衰弱樹の病害虫発生状況 (n=62, 重複感染あり)

図2 剪定時の切り残し

表2 調査ほ場における枯死の原因

JA名	調査ほ場数	枯死の原因		
		枯死障害	土壌病害 ^z	その他障害等 ^y
フルーツ山梨	9	6	1	2
ふえふき	13	9	3	1
南アルプス市	11	7	2	2
合計	33	22	6	5

^z ならたけ病類と判断されたもの

^y 根腐れや、管理による傷などが原因と判断されたもの

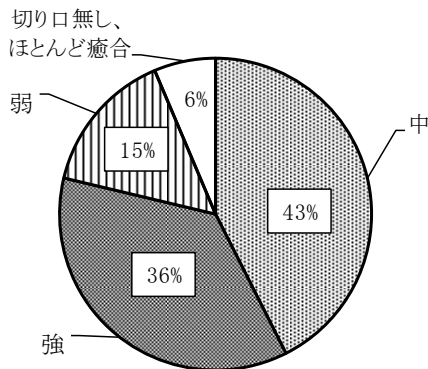


図3 枯死障害発生樹の剪定強度 (n=47)

剪定強度は、剪定切り口面積と主幹断面積の比率
弱 0.5以下、中 0.5以上1.0未満、強 1.0以上

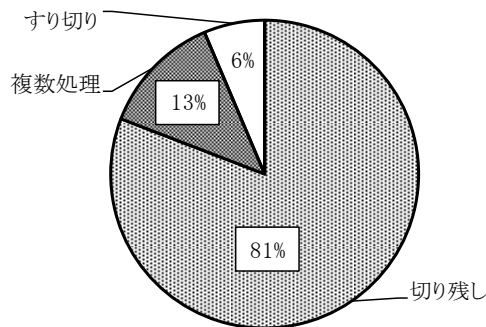


図4 枯死障害発生樹の剪定切り口の剪除方法による分類 (n=47)

[その他]

研究課題名：モモの枯死障害の発生原因の究明

予算区分：県単

研究期間：2016～2021年度

研究担当者：池田博彦、萩原栄揮、富田 晃、綿打享子、内田一秀、手塚誉裕、加藤 治、國友義博、那須英夫